

しんこうじいせき 真光寺遺跡 現地説明会 資料

(一財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 遺跡の概要

真光寺遺跡は梓川^{あずさがわ}右岸の河岸段丘上に立地します。遺跡の東方には7世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群^{やすづかこふんぐん}・秋葉原古墳群^{あきはばらこふんぐん}が分布し、西部には弘治三(1557)年中興^{ちゅうこう}と伝わる真光寺が所在しています。

松本波田道路の改築に伴って、当センターが2021年(令和3年)から発掘調査を実施しており、昨年度は古墳、溝跡や土坑(穴)などが発見されました。

本年度は、新たに発見されたもう1基の古墳と、中世の土葬墓・火葬施設などの調査を行っています。

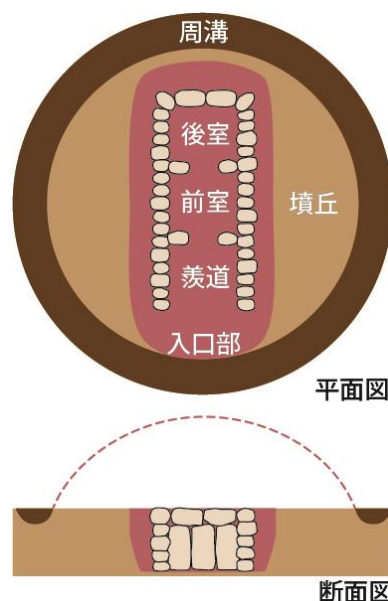
2 新たに発見された古墳(SM02)

昨年調査した古墳(SM01)の西約40mで、2基目の古墳を確認しました(正式な古墳名は2基とも未定)。後世の削平で墳丘は失われていますが、南東に入口を設けた横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}の下部が残っていました。一部残存する周溝から推測すると、墳丘の東西直径は12mほどと考えられます。

石室は、地盤を掘り窪め、主に扁平な川原石を用い、側壁は石を平積みに、奥壁は下段に3枚の石を立て、上段は平積みにして構築されています。奥壁から2.6mと5.3mの位置に、左右の側壁から内側に突き出すように立てた石(立柱石)により、石室を3分割しています(羨道^{せんどう}・前室/後室)。残存する石室の規模は、全長約8.6m、幅は奥壁で1.1m、前室中ほどで1.3m、入口部で1.8m、高さは0.7mです。



石室全景 (南東から)



古墳模式図

こうした石室構造はSM01さらに安塚古墳群や秋葉原古墳群を構成する古墳と類似性があります。

遺物は石室入口部から須恵器の大甕・坏・坏蓋・小形平瓶、石室内から須恵器の坏・高台坏・坏蓋・長頸壺・フラスコ瓶、土師器の坏などが出土しました。

今後検討する必要がありますが、出土遺物の特徴から、SM02は7世紀後半に築造され、8世紀に入っても埋葬が続けられた(追葬)と推測しています。



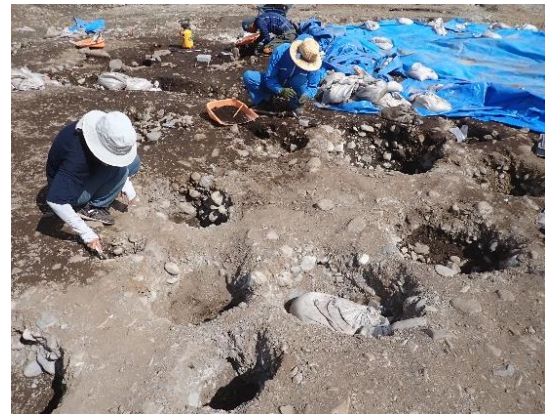
前室左壁際から土器が出土

3 中世の土葬墓・火葬施設

中世(鎌倉時代～戦国時代)の遺構には大きく2種類の施設が見つかっています。

一つは、30基余りが見つかった火葬施設です。現在の真光寺寄りで増える傾向はあるものの、広範囲に点在しています。渡来銭(主に中国北宋の銭)を伴う例があります。

もう一つは、真光寺の東40～50mの地点に集中する土葬墓です。膝を曲げて寝かせた大きさの墓も3基ありますが、最も多いのは70cm×50cm以下の小さな墓穴です(写真右)。50基ほどが確認されています。



小さな墓穴が列をなしてみつかった

典型的なのは、上面に平石を置き(写真左下)、穴の壁際にこぶし大の石を積み、底面近くから頭骨の一部や歯だけが見つかる例(写真右下)です。副葬品はありません。時期は、火葬施設を壊す例があることと、全身埋葬の墓壇から洪武通宝(中国明の銭)が出土していることから、中世でもやや新しい時期だと思われます。

墓穴の大きさから推測すると、①最初から頭部だけを埋納した、②改葬後に残りのよい歯周辺部分だけが残ったなどの可能性が考えられますが、類例がなくはっきりとしたことはわかっていません。いずれにしても特異な埋葬事例として注目されます。



平石で蓋がされた例(平石の下は空洞になっていた)



底面近くで頭骨が出土した例